
リトルウィザード

飛鳥ザザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルウィザード

【Nコード】

N4709H

【作者名】

飛鳥ザザ

【あらすじ】

少年は、ひとりの男と出会った。「心ない雪なんか埋もれるな」手を引っ張られて、灰色の中から抜け出す。過去は忘れられるものじゃない。それでも未来は明るい色であってほしい。残酷な過去を持つ少年と仲間たちのささやかな物語――

プロローグ（前書き）

はじめはシリアスですが、途中から思いきりギャグになる可能性があります！
ご注意ください！

プロローグ

― どうして？

どうしてなの？僕はそんなこと望んでないよ
お願い

僕を置いていかないで！！

『シネバスベテガオワルンダ』

：届かなかった

僕の両手はあと少しの所で悲しく落とされる

真っ赤に染まる真っ白な色

「僕をまたひとりぼっちにしないでっ！！！」

― バシッ

「なあに、しょぼくてんだ？」

肩を思いきり叩かれて目を覚ました僕が見たのは、黒いコートに真
っ白なマフラーをした若い男だった。

「……」

無言で遠い空を見つめる。

僕は雪の降り注ぐ寒空の下にいて、すっかり冷たくなった両手を
握りしめる。

その後しばらく、沈黙が続いた。

今までも僕に声をかけてきた人間はたくさんいた。でも、僕が反
応も示さないとわかると、そっと食べ物置いて行ったり、嫌味を
言ったりしながら、すぐに離れていった。

「ここは、世界の果てにあるといわれる、ベレリカ。通称、終わりの地。」

そして僕のいるこのスノンベルは、1年中雪の降る静かな国。

この国の中心にある、一番大きな時計台のそばで、僕はもう一週間もの間、遠い空を見つめ続けている。

灰色に染まり、心なく降り続ける雪の中、その色に埋もれてしまうまで…。

「……」

僕が何の反応も示さないまましていると、男はハア…とひとつ溜息をついた。

やっと僕の前からいなくなってくれるんだ。はやく…はやく目の前から消えて。

そう思っていると、ふと視界から男が消えた。

「うーん、俺も家出っつーか…さっき追い出されたんだよ、出てけっ！てさ」

その時の相手の顔マネをしながら、笑ってなおもしゃべりかけてくる男は、僕の隣に座り込んでいる。

人間のぬくもりをかすかに感じる…それが、とてつもなく嫌でたまらない。

「…はやく、僕の前から消えてよ」

男の顔も見ずに、小さな声で訴えた。これ以上、人間と関わるのもうこりごりだった。

あの時の光景が蘇る――

真っ赤に染まった真っ白な色。

『シネバสบエテガオワルンダ』

耳に残る声を思い出して、震えながらうつむいた僕の顔を、男は両手でしっかりとはさんで、自分の方に向けた。

驚いて、うつろだった瞳をぱっと開くと、漆黒の髪に、鈍く輝く

銀色の瞳が僕をじっと見つめていた。

「心ない雪なんか埋もれるな、お前は精一杯生きるんだ」

心を読まれたかのような言葉に、僕は涙がこぼれそうになるのを必死でこらえる。

そして男は、そっと、自分の首に巻いていたマフラーを巻いてくれた。

…人間じゃない、無機質なぬくもりに、僕は少しだけ安心して、聞こえないように少しだけ泣いた。

しばらく経って、男はふっと真剣さが抜けて、にっこりと微笑んだ。

「俺の人生の3分の2も生きてなさそうなヤツは、オ・ト・ナな俺に従いなさい！ なっ？ …ってことで、これから俺の家にレッツゴー！」

そう言っていきなり立ち上がった男は、コートについた雪をはらうと、僕に向かって手をのばしてきた。

差し出された手に困惑していると、男は無理やり僕の手を引っ張って立たせた。

男の強引さに怪訝な顔をしていると、男は大きく笑った。

…そして僕は、一週間ぶりに、雪を足で踏みしめる。

笑った男の顔を呆れた様子で見ながら、男に手を引っ張られ、灰色の中から抜け出した。

1＊歩き出す今日（前書き）

やっと名前が出ました〜！（笑）

登場人物も増えました！約1名ですが…。

では、どうぞ！

1＊歩き出す今日

僕は今、＜キャンディークランチ＞という、スノンベルいち、美味しいといわれているお菓子屋にいる。

「うーん…、あいつはこれの方が好きかなあ？」

隣で真剣に悩んでいるのを見ながら、僕はハア…と溜息をついた。

――1時間ほど前

僕は、男に連れ出された。

そして、笑いながらはじめに聞いてきたことは、

「家出少年くんの名前と年齢と住所と電話番号と趣味と好きなものと嫌いなものと…えっと、あと…」

なんか…色々だった。

まだうーん、とうねって聞きたいことを考えている男に、僕はとりあえず、さっき聞かれたこと全部を面倒くさく答えた。

「僕の名前はルセ・ティルス、年齢は13、で、住所と電話番号はノーコメント、趣味はまあそれなりに、好きなものは魔法、嫌いなものはあなたみたいな人間です、以上」

さらさらと言うと、男は盛大に笑った。

「お前…面白いヤツだなっ！ルセか、んじゃこれからよろしくな！…くくく」

まだ笑い続けている男を見て、僕はぽかんと呆れた。何がそんなに面白かったのか…僕には理解できない。

しばらくして、ようやく笑いのおさまった…けど、まだ頬を膨れさせて笑いをこらえている男が、僕の右手をとり、握手をした。

「俺は、ユリク・レザン、年齢は24…っつーことは、お前、やっぱおれの人生の3分の2も生きてねえじゃん！…んで、住所はこれから行く所で、電話はない！金ないし！趣味はこう見えて料理、好きなものはアップルパイ、嫌いなものは…ネ…コ…だ…」

はじめはテンション高かったのに、いきなり最後で下がった。

どうやらこの男：ユリクは、心底ネコが嫌いらしい。

その時僕は、ちょっぴりいたずら心がわいて、時計台で通りすがりの人間にもらったネコの形をしたキャンディーを目の前に出してみることにした。

ネコの形ってだけでだめなのか、気になるし…。

そして僕は実行した：鳴き声とともに。

「にゃあー」

・・・。。

「~~~~っ!?!?!?!?」

言葉にできない呻きとともに、ユリクは泡を吹いて倒れた。

「…っぷ、あははは」

倒れたユリクの顔があまりにも面白くて、僕はお腹を抱えて笑った。

これじゃあ僕は嫌なヤツみたいだけど…とってもすがすがしい。

今までこんなに楽しいって気持ちを味わったことがあっただろうか？

僕も、こんな風に笑えるんだ…。

「ん…、やったなあールセ！お前の嫌いな、人間の俺が追いかけてやる…っ!」

いつの間にか元に戻ったユリクが、僕をとっ捕まえようとした所をするりと抜けて、走り出した。

「来れるもんなら、来てみたら？」

挑発まじりに笑って答えると、ユリクも笑って追いかけてきた。

傍から見れば、馬鹿みたいだけど、こうやって笑っていることがあんまりなかった僕には、とっても新鮮なことだった。

しばらくして、追いかけてこに疲れた僕達は、ユリクの仲間にご機嫌取りの品を買いに行くいくため、お菓子屋に入った。

…そして、今にいたる。

「なあー、ルセ？ものすっごくキャンディー好きの女が喜ぶのって

「どれだと思う？」

＜キャンディークランチ＞に入ってからというものの、ユリクはひとりの女の人にあげるためのお菓子を必死で探している。

ユリクを追いだした人間は、どうやら女の人のようだ。

「：ペロペロキャンディーとか？」

「それ、いいかしんねえな！」

僕がそう提案すると、ユリクは目をキラキラ輝かせて、ペロペロキャンディーがずらりと並んでいるコーナーへ歩いていく。

「こっちがいいか？：うーん、どれがいいんだ？？」

頭にたくさんのハテナマークを浮かべているユリクを見ながら、僕は少し気持ちが沈む。

僕は：ユリクの仲間の人に嫌われないだろうか？

こんなみすぼらしいヤツなんて、誰だって嫌いになる。

さつきから、歩いている途中、何度も振り返って僕を嫌そうな目で見る人間達と何回も通りすがった。

僕は、1週間も同じ服で、ましてやお風呂なんて入ってない。

さつきユリクが巻いてくれた真っ白なマフラーだけが、新しい香りと輝きをもっている。

そして：ユリクは気を使ってるのか、聞いてこないけど、僕の左目は、包帯で隠されている。

小さい頃に、逃げてる途中に捕まって、人間に：目を焼かれた。かろうじて右目は守れた。

けれどこの左目には、ただ焼かれただけじゃなくて：呪いの刻印を刻まれたんだ。

【人間と関わると、関わった人間すべてが苦しむ。大切なものをなくす度、お前に死が訪れることは少なくなる】：と。

僕は、人間じゃない。姿形は人間でも、魔法使いという、生まれ持った才を持つ。

この世界では、普通の人間にはない能力を持つ者を、＜エジェフト＞という。

けれど、普通ではないということだけが世界中に広まって、エジプトは、人間達に忌み嫌われてきた。

そして僕の魔法使いの家系も、人間達から敬遠されがちだった。しかもとても強力な魔法を使っていたため、同じエジプトからもライバル視されてきた。

そしてついに起こった人間とエジプトと僕の家との戦い。けれどこの戦いは、対立するエジプトと人間が手を組んでいて、僕の家を陥れようとした、卑怯な戦いだった。

その最中、逃げ遅れた僕は、対立するエジプトの支配下にいた人間に左目を焼かれた…。

この刻印は、僕に関わった人間は、この世から消える。そして僕は永遠の命に近づく…残酷な呪い。

…それでも、魔法を嫌いにならなかったのは、あの子がいたから。でも、僕に関わったせいであの子は…。

悲しいことを思い出す。

ふいに嫌な考えが頭をよぎった。

じゃあ…ユリクは？

僕に関わったユリクは？

またあの時と同じように…？

急に怖くなって倒れそうになった時。

「おっと、まあ…た余計なこと考えてただらう？このネガティブ少年！俺の仲間は、色んなこと抱えて苦しんでるヤツばっかだから、きつとお前のことも理解してくれるさ」

支えてくれたユリクは、また僕の心を読んだ。

苦しんでいるのは僕だけじゃない…それは何度も言い聞かせてきた言葉。

人間に関わっちゃだめ：わかっているのに。

どうしても、離れられない。

笑顔で差し出された手を、どうしても掴んでしまう。

「まあ、まだまだ子供なんだから、大人に頼ってもいいと思うよ？俺とかさ」

にっこりと微笑んでくるユリクを見る。

そういえば、ユリクは僕が魔法が好きって言っても、笑っただけだった。

今も、僕を自分の家に連れていってくれようとしている。

誰からも嫌われて、居場所のない魔法使いの僕。ユリクはそんな僕を嫌な目で見てはこない。いっこり笑ってくれるだけ。

さっきまでは、マフラーのぬくもりに安心していたけど、いつの間にか、ユリクが笑ってくれることにホッとしている自分がいる。

：信じてもいいのかな？

ユリクはきつと、ずっと一緒にいてくれる。

ただの思いすぎじゃなくて、現実になるって。

：そう願いたいな。

その後、ユリクと僕は、ペロペロキャンディーのやたらとカラフルな色ばかりを集めて、ラッピングしてもらい、店を出た。

「んじゃ、家に帰るか」

僕は緊張でドキドキしていた。

どんな人なんだろう？

期待に胸膨らませながら、多少の不安を抱えつつ、僕はユリクについて歩いた。

町を抜け、森の奥深くに行くと、赤い屋根が見えた。

煙突から白い煙がもくもくとあがっている。

まるで、ドールハウスみたいなかawaii造りの建物だった。

ユリクは、扉を3回叩いてから、叫んだ。

「レナリアー！！たっだいまー！！」

その後、ユリクはなぜか小声で、僕に少し扉から離れるように言った。

すると、建物の中から、ドシドシドシッという音が聞こえてきて、バンツと扉が思いきり開いた。

このことだったのか…と感心する暇もなく、ユリクより少し低い背丈の女の人が出てきた。

そしていきなりユリクの襟を掴み…上げた！！

「ユリク！！帰ってくんなっつたでしょ！？もう今度はないって言ったわよねえ！私！」

早口で怒鳴りながら、キリキリとユリクの襟を締め上げながら、体を宙に浮かせる女の人…超絶、怖かった。

「あ、あの…その辺でやめた方がいいんじゃないですか？…泡吹いてますけど」

恐怖で、変に敬語になってしまう…。

僕が止めに入ると、女の人…大きな、紫色の瞳をパチパチさせて、ユリクから手を離れた。

当然ユリクは、地面に叩きつけられた。

それを心配して手を伸ばした瞬間、女の人に正面からぎゅっとハグされてしまった。

「きゃあー！カワイイ！！あなた、誰？名前は？私は、レナリア・フェルシエよ！よろしくねっ！」

ピンク色の大きなくなるくるの2つの巻き髪が、僕の頬をなでる。

僕は驚いてあたふたしながら答えた。

「ぼ、僕は、ルセ・ティルスですっ、よ、よろしくお願いしますっ…レナリアさんっ」

名前を呼ぶと、レナリアさんはまたもきゃあ！！と叫んで、さらに強くハグしてきた。

く、苦しい…。

「レナリアさんっ、だなんて！！レナリアでいいのよ！？ルセくんっ」

レナリアさん…の力が強すぎて、僕もユリクと同じく、泡を吹きかけている。

するとひよこつと立ち上がったユリクが、レナリアさんと僕をペリッと離してくれた。

「ストーップ、レナリア！ルセが死にかけだ」

「あ、ご、ごめんね！ルセくんっ！！」

フラフラになりながら、なんとか自分の足で立つ。それから改めて、自己紹介をしあった。

「えーっと、さっきも言ったけど、私はレナリア・フェルシエ、ユリクと同じ年で、幼馴染…ってか、腐れ縁かしら？まあ、そんな感じよ」

レナリアさんは、ユリクと同じ年で、のあたりから少し嫌そうに答える。

そんなにユリクが嫌いなのかな？まあ、わからないでもないけど…なんて。

そして僕も自己紹介をする。

「僕は、ルセ・ティルス、年齢は13です、レナリアさん」
するとレナリアさんの目が光った！

そしてまたもやレナリアさんがハグをしようとした所を…ユリクがすかさず止めた。

怒って頬を膨らませるレナリアさんが、いきなり真剣な顔になる。
どうしたんだろう…？

「くんくん…この匂い、キャンディーじゃない！？」

鼻をひくひくさせた先は、ユリク。

「ああ、そうそう、キャンディー買ってきたんだ」

ユリクがそう言って、コートのポケットから、ラッピングしてもらったペロペロキャンディーを出してレナリア渡す。

さっき地面に落とされた時に、ユリクはキャンディーを死守したらしい。

「ありがと、ユリク！…でも、次やったら、マジで追い出すから、ってか追放するから」

と若干脅しつつ：レナリアさんは僕に、優しくにつこり微笑んだ。

「さっ、玄関で立ち話もなんだし、中でゆっくり話そうぜ」
そう提案して、ユリクは先に家に入っていく。

「ユリクが私に追い出された理由もじっくり話しましょう」
レナリアさんはにこしながら僕に言ってくる。少し困った顔をしながら、レナリアさんに次いで、僕も家に入った。

家に入った瞬間に立ち込める、甘い香りとあたたかな雰囲気、僕はとてもとても安心した。

1＊歩き出す今日（後書き）

なんだか色々ゴチャゴチャしてきました。

これからまた登場人物がじりじり増えます（笑）

では、読んで下さって、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709h/>

リトルウィザード

2010年10月9日20時19分発行